

寡黙なる妙好人

龍 口 明 生

はじめに

近年の妙好人伝の研究の隆盛は目覚ましいものがある。江戸時代の仰誓編『妙好人伝』の刊行以来浄土真宗の信者の伝記、即ち妙好人伝がよく読まれ、称揚され、或いは妙好人伝に登場する人々の事跡を訪ねることも盛んに行われている。次々に新しい妙好人が紹介され、欧米にも拡がっている。

そもそも「妙好人」とはどのような人物を指しているのだろうか。定義も様々であり、ある時は、体制順応型の人と評されているし、奇行とも思える行動が真摯な人間らしさの表われであると捉えられる時もある。自らの信仰を吐露した言語表現の面から評価を受ける場合も少なくない。

しかしながら、仰誓の『妙好人伝』に立ち返り、その一話を仔細に読む時、これらの評価に相当しない者も妙好人と見做されている事に気づかされる。そこに描かれているのは、正信念仏者ではあるが、概ね平凡な生活を送った人であ

り、並はずれた宗教的資質を持った人でもなく、自分の信心を殊更に他人に披瀝する訳でもない。決して多弁ではなく、謂わば寡黙なる念仏者である。そのような人々を仰誓は何故妙好人として取り上げたのか。本稿では仰誓の「妙好人」の定義を改めて論じてみたい。

一 仰誓の妙好人観

仰誓撰『妙好人伝』〔二巻本〕に於ける仰誓の妙好人観についてはすでに論じた。仰誓の妙好人観については次のように要約出来よう。

先ず第一に正信念仏者である。そして行・住・座・臥何れにあつても念仏を歎び、しかも時処所縁を問題としない人物である。また生活環境がいかなる状況であれ聴聞を怠ることがない。さらにはいかなる人物であれ、即ち貴賤縉素を簡ばず、男女老少を謂わず、造罪の多生を問わず、修行の久近を論ぜず、妙好人となり得る、というのが仰誓の妙好人観で

あつた。⁽¹⁾

二 近年しばしば取り上げられ論究される妙好人

ここでは二〇一三年三月に刊行された、林智康・井上善幸・北岑大至編『東アジア思想における死生観と超越』（方丈堂出版）に見られる妙好人について検討する。本書の第四部は「妙好人における死生観と超越」であり、公開講座における二名の発表、ワークショップ「妙好人伝の世界」について二名、同じくワークショップ「世界に広がる妙好人」について二名、そして二名の論考、計八名の成果が掲載されている。

この書の中で「妙好人」として取り上げられている人物を列挙すると、

神英雄稿「石見の妙好人」に於いては、

一、近重善太郎（一七八二—一八五六）

一、磯七（一七六〇？—一八五一？）

一、小川仲造（一八四二—一九一二）

一、浅原才市（一八五〇—一九三二）

一、川上清吉（一八九六—一九五九）

一、井上巧（一八八九—一九六六）

一、秀浦健一（一九二〇—一九六九）

菊藤明道稿「妙好人の死生観と願い——その言行から苦悩を

超える道を学ぶ——」に於いては、

一、大和の清九郎（一六七八—一七五〇）

一、石見の浅原才市（一八五〇—一九三二）

一、有福の善太郎（一七八二—一八五六）

一、讃岐の庄松（一七九九—一八七二）

一、因幡の源左（一八四二—一九三〇）

佐々木惠精稿「世界に広がる妙好人——ヨーロッパの念仏者たち——」に於いては、

一、ハリー・ピーパー（一九〇七—一九七八）

一、ジャン・エラクル（一九三〇—二〇〇五）

一、アドリアン・ペル（一九二七—二〇〇九）

川添泰信稿「浄土仏教における出離生死の問題」に於いては、

一、浅原才市（一八五〇—一九三二）

北岑大至稿「讃岐の妙好人 庄松の言行にみる死生観と超越

——いのちの地平の物語——」に於いては、

一、庄松（一七九九—一八七二）

以上五名の論攷の中で取り上げられている妙好人達は決して一様ではなく、それぞれ個性的である。しかし佐々木惠精氏が言及されている三人の妙好人を除き、彼等に共通して言えることは多くの人々に接し、領解した念仏の教えの一端をしばしば発言している点である。この種の妙好人が共通して注目されていることは、柳宗悦稿「妙好人の存在」中の次の

叙述を想起せしめる。

昔の妙好人の物語は、幾つかの『往生伝』に記録されているが、極めて断片的で、その信仰の生涯を審つまひらにすることが出来ぬ。『妙好人伝』と題して上下四編の書物が編まれたのは、江戸時代も末で、天保安政の頃であるからそう古くはない。明治三十二年になって更に『新妙好人伝』二巻が追加された。これらのものは、妙好人を紹介したまとまった書物であり、貴重な記録ではあるが、惜しい哉、各々の記述はあまりにも短く、かつ通俗を旨とした説教風な収録であるため、信仰の生涯の生おい立ちの跡などはよく分からぬ。

『東アジア思想における死生観と超越』において取り上げられた妙好人達の大半は柳宗悦が主張する如く彼等の生涯、或いは正信念仏者となつて以降の言動が詳細に伝えられる人々であり、つぎに検討する仰誓撰『妙好人伝』「二巻本」に掲載されている妙好人達とはその言動の面で大きな相違が見られる。

三 仰誓の採録した妙好人の言動

仰誓撰『妙好人伝』「二巻本」の第一（即ち『親聞妙好人伝』に相当する）には十人の妙好人の伝記が、第二には二十六人（但し第六話は標目のみであり、実際には二十五人）の伝記が収載されている。但し、本稿では『妙好人伝』第二所載の十人のみに言及する。

寡黙なる妙好人（龍 口）

『妙好人伝』第一

第一話 播州治郎右衛門

経済的に至つて貧しい治郎右衛門と富裕な菱屋了玄とは信仰上の無二の朋友である。或る日菱屋了玄は治郎右衛門が病に倒れているのではないかと訝り、見舞いに彼の家を訪ねる。菱屋了玄は治郎右衛門の貧困な生活を哀れみ金子を与えようとする。此の行為に対し治郎右衛門は固く拒否するのみならず、「貧富苦楽ハ前世ノ業因ヨリアラハル、ユヘ、貴方ノ如ク富裕ナルモ前世業也。我コトク貧賤ナルモ宿業」であつて、貴方が私を救わんとするのは「因果ノ理ヲワキマヘ玉ハヌト云モノ也。」⁽³⁾と怒り、今日より絶交すると言う。菱屋了玄は己の非を認め謝るのである。

ここでの兩人の口論は、この場一回限りのものであり、周囲の人々に語り継がれる性格のものではない。

第二話 河内利右衛門女阿霜

善立寺門徒の利右衛門の娘阿霜は八歳であるが、常に寺へ参詣し、念仏を歡ぶ小兒であつた。この少女は寺院の賽銭を盗み菓子を買つた。この行為は墮地獄の罪業であり、いかが懺悔すべきかを住僧に質問する。住僧の教えに阿霜は涕泣し、歡喜し、いよいよ仏恩を仰ぎ朝夕の参詣を怠らなかつた。また地震があつた時、家族の者は皆門外へ走り出たが、阿霜のみは内仏に灯明をかがげて念仏していた。家族の者がその

ことを不審に思い問い質すと、「定業ナラハウチツフサレテ死センモハカリカタシ。免テモ死ヌヘキナラハ、門外ニテ死センヨリ、仏前ニテ称名モロトモ終リナントオモフハカリニテ仏前ニ居リシ也⁽⁴⁾」と答えている。

前者は住僧への阿霜の質問であり、後者も家族の質問に対する阿霜の答であって、一般に広く語っている言葉ではない。但し阿霜は人々に念仏を称えることを勧めているが、勧める相手は使用人達であって、その範囲は限られている。

第三話 和州清九郎

清九郎についての記載は分量も特別多く、多数の物語が述べられている。仰誓は二十九歳の時、同行を連れて吉野郡銚立村の清九郎を訪ねている。近隣の「同行ノ物語ニテコノ男ノコトヲキクニ、事々宗致ニカナフコトノミ也。其品多ケレハ、ナカ／＼筆ニツクシカタシ。タ、一二ヲ後ニカキ付オキヌ⁽⁵⁾。」とある。清九郎は篤信者としてすでに周辺に広く知られていた。

清九郎の言動は周囲の人々によく知られ、清九郎自身も念仏の教えの味わいをしばしば語っている。

第四話 当国六兵衛

六兵衛は常に「称名スルハカリ」の者で、「寛延元年ノ冬、師ノ僧ノ剃刀ヲウケ、落髪シ、自ラコノミテ教信ト法名⁽⁶⁾」した。ところで真言律の万福寺の比丘が彼に五戒を持つよう

度々に勧めるのであるが、六兵衛は「我ハ愚痴ノ身ナレトモ、弥陀ノ本願ニヨリ、念仏シテ浄土ニ往生スル也。（中略）（持戒の功德を）カサネテス、メ玉フナ⁽⁶⁾」と答えている。そしてこのことを彼自身仰誓へも語っている。また臨終近き六兵衛の称名念仏を歎ぶ逸話が、常蓮寺住僧の話として述べられている。

六兵衛が自分の信仰を語っているのは住僧に対してであり、家庭内に於いてであって、広く周囲の人々に対してではない。

第五話 但州六左衛門児

六左衛門一家は日蓮宗の徒であり、彼の子供の乳母は浄土真宗の門徒であった。乳母は常に念仏を歎び、その影響で三歳の小児も念仏を口にするようになる。そのことを父母は快く思っていないかった。そこで乳母は元旦には念仏しないよう小児に注意する。ところが元日の朝家族の前で一首の歌「カリノ世ニ露ノ命ヲイハフトテケサハトナヘヌ弥陀ノ名号⁽⁷⁾」を詠む。家族は「ワツカ四歳ノ小児」が歌を詠んだ事に「奇異ノオモヒヲナシ⁽⁷⁾」、宗門を改め一家各々真宗に帰依した。

四歳の小児が歌を詠んだのは乳母を含めた家族の中に於いてであった。

第六話 和州辰三郎

辰三郎は十四歳の童子であつて、「弥陀ノ本願ヲ信シ称名念仏タユルコト」がなかった。ところが病床に臥す身となり、恢復の見込もなくなった。辰三郎は剃髪し「入道ノスカタトナシ玉」へと昼夜念願するので親はそれを許し、手次の寺僧に依頼して剃髪させる。ところが或る夜辰三郎の夢に「貴キ老僧来リ、道誓々々ト呼玉」うので、これが自分の法名だと気付く。老いたる父母に先立つ不孝が心懸かりであることを語る。老僧は歌でもつて「今クルモワカレハ同シ道シバノ」と告げるのに応えて辰三郎は「誓ノ舟ニノルソウレシキ」とそえ、老僧はまた「ヨム人モヨマスル人モ大悲ヨリトリモナホサス機法一体」とつづけている。更にドウセイ（道誓）の「セイ」の字は「誓」なのか「清」なのかの質問に老僧は「チカヒシモキヨキモ同シコ、ロカラ六字ノ外ニ名コソアルマシ」⁽⁸⁾と答えている。そこで辰三郎は夢から醒め、やがて病死するのである。

老僧と辰三郎の遣り取りは、ただ辰三郎の夢の中のみのも出来事である。

第七話 江州次郎右衛門

馬子の次郎右衛門は「フカク本願ヲ信シテ行住座臥、称名相続」する者であつた。或る日長州の侍毛利監物が彼の引く馬に乗る。馬を引きながら称名念仏する次郎右衛門を監物は怒り「イマ〱シキ念仏ヲ申スヘカラストイヘハ、オトロキ

テト、マリケレトモ、二三町ユクホトニ、又ワスレテ称名スレハ、又大ニコレヲ呵ル。」といったことを繰り返し、遂に監物は首を刎ねんとして刀を振り上げるも次郎右衛門は「ナホスコシモ驚カス、首ヲサシノヘテ念仏シ居ケル」状態であつた。実は監物自身代々真宗の教えを受ける門徒であり、次郎右衛門のその態度に「ア、至心信樂忘^レ己トハ、実ニ御身ノコト也」⁽⁹⁾と驚歎し、それより生涯同行の交わりを深くしたのである。

この逸話は次郎右衛門と監物の二人のみの言動である。

第八話 勢州治左衛門父子

治左衛門の家は代々高田派の門徒であつたが、彼は「神道ヲ好テ深ク仏法ヲ忌嫌」う有様であつた。嫡子市十郎は「幼少ナレトモ深ク仏法ニ帰シテ、ツネニ念仏ヲコタリナク」時々父親に念仏を勧めるのであつたが、父親は全く聞き入れようとはしなかった。

ところで市十郎の死を契機に一族の強い勧めにより治左衛門は剃髪し、教随という法名を授かり、その結果念仏門に歸入した。彼の詠める歌として、「フル里ヘカヘルヤ法ノ旅衣錦ニマサル麻ノ墨ソメ」と「教アル世ノハカナサヤ思ヒ子ノ先タツ法ノ道ニ随フ」⁽¹⁰⁾が述べられている。

治左衛門の言動の範囲、またかれの歌を聞いたであろう者は家族、一族そして信光寺の住持等と限られた人々であつ

た。

第九話 常州忠左衛門

忠左衛門は「禪宗ノ流ヲ汲モノナリシカ、壮年ノコロ、愛妻ニオクレ、フカク世ノ無常ヲ知テ後世ノ志」が切であつた。宗教を求め禪宗から神道へ、又禪宗、真言、天台宗、更に法華宗へと遍歴するも、何れにも満足せず六十歳を過ぎた。やがて後妻を娶る。妻が窃かに礼拝している本尊が阿弥陀仏であることを知る。最後には浄土真宗へ帰依するのであるが、忠左衛門は妻にその理由を聞き質すと「ワレハ代々本願寺ノ御流ヲ汲モノ也。カ、ル罪惡ノ身カ、弥陀ノ本願ニタスケラレマイラスルコトノアリカタサニ、シノヒクニ御礼ヲ申也」と答えるのであるが、忠左衛門は一笑に付す。妻は夫に他力念仏の教えを『御文章』を中心に説き、夫に『御文章』を与える。忠左衛門は拝読を重ね、「他力信心ヲ領納シ、鳥ノ巢ノ無量寿寺ノ門徒トナリ、後ニ祝髪シテ、法名ヲ浄閑⁽¹¹⁾」と言つたのである。

『御文章』を拝読し、他力の教えを語り、相手が正信念仏者になるといふこの逸話は夫婦間のことである。

第十話 京都七郎右衛門

七郎右衛門は入道して法名を自休と言うが、彼は大谷の報恩講に参り、茶所で休息中に急死する。ところで自休の弟の住まいは醍醐の里に在つたが、そこへ自休が訪ね来たり、庭

に立つたままで「開山ノ御召ニヨリテ参ル也跡ノ孫子ニコ、ロエテタベ⁽¹²⁾」という歌を詠んですぐに帰つた、という不思議なことであつた。

この逸話の中の自休の歌は、ただ弟のみを相手に詠んだものである。

以上十人の妙好人の中、第三話 和州清九郎の物語は例外として、彼等の多くは周囲の人々から注目されるような人物ではない。念仏の教えの領解を非常に飲んでゐるが、それを表現する場は家庭内、またはごく親密な関係にある人々との間に限られている。或いは縁のある寺の住職との間の会話、質問等である。この観点から言えば、彼等は概して寡黙である。そして彼等が発言しているのは他力念仏の教えを領解するに至る過程での発言であり、領解の味わいを端的に含む発言である。

むすび

仰誓撰『妙好人伝』第一に叙述されている妙好人の多数が寡黙であるといふことを指摘したが、このことは仰誓が叙述した各逸話の中において言えることであつて、実際に彼等自身が寡黙であつたか否かとは別の問題である。撰者仰誓の立場としては、或る念仏者に關してたとえ多くの逸話が入手出来たとしても、それ等全てを叙述する必要性を感じなかつた

のであろう。ここには何の目的で「妙好人伝」を編纂したのかという仰誓の姿勢が窺えるのである。

同様に妙好人を取り上げている近年の「妙好人伝」或いはそれに類するものの著者、編者それぞれに妙好人観乃至は妙好人の定義があり、目的があることを考慮しなければならぬ。

念仏の教えを歎ぶ言語表現豊かな人のみが妙好人なのではあるまい。念仏の教えは木訥なる人をも簡ばないのである。

〈キーワード〉『妙好人伝』「三巻本」、仰誓、寡黙なる妙好人

(龍谷大学名誉教授)

- 1 龍口明生「仰誓の妙好人観」(『仏教史研究』第十四号、昭和五十五年)及び龍口明生「妙好人伝」とその周縁」(『印度学仏教学研究』第五十六巻第一号、平成十九年)参照。
- 2 寿岳文章編『柳宗悦妙好人論集』(岩波文庫、一九九一年)一五五―一五六頁。
- 3 『大系真宗史料』伝記編8『妙好人伝』(法蔵館、二〇〇九年)三三頁。
- 4 前掲書、三六頁。
- 5 前掲書、三八頁。
- 6 前掲書、四五頁。
- 7 前掲書、四七頁。
- 8 前掲書、四九頁。
- 9 前掲書、五〇頁。
- 10 前掲書、五一頁。
- 11 前掲書、五四頁。
- 12 前掲書、五四頁。

寡黙なる妙好人(龍口)